

はじめに

風間 伸次郎

(東京外国語大学助教授)

ここに『言語情報学研究報告7 フィールド調査による口語資料の収集及びその分析』をお届けする。本書に収録した論文はもっぱらその言語／方言が話されている現地でのフィールドワークが基になっている(坂田晴奈のフィンランド語の論文を除く)。文献による研究にも、書誌学の知識や諸写本の存在などをはじめとするさまざまな苦労があるが、現地調査による研究にも、現地へのアクセスや話者との信頼関係の確立などをはじめとする苦労がある。その意味で、今回特に現地調査に基づく言語研究の論文が東京外国語大学のCOEの成果として刊行されることを、フィールドワーカーの一人としてたいへん喜ばしく思う。

本書所収の論文のうちの4つは口語コーパス(口語テキスト)の収集とその分析からなっている。しかもテキスト自体が多くページ数を占めている。そこでここでは口語テキストを収集し整理・発表することの重要性について簡単に触れておきたい。

理論の研究や、演繹的な推論による研究も重要であるが、他方でその考察は十分な言語事実による裏づけを必要とする。特にそれが通言語的な考察となれば、理想的には世界中の何千に及ぶ諸言語での検証を必要とするはずである。しかし諸言語の記述はそれ自体がまだ十分にはなされていないのが現状である。特に音素やアクセントといった小さい単位の研究は進んでいるが、前後の文脈を見据えたしっかりした文法全体の記述となると、満足のいく記述がなされている言語は少ない。さらにその内容的な観点からすれば、それらの文法記述も、ヨーロッパにおいて発達した偏った伝統的枠組みに縛られていたり、他の言語からみて興味を引く一部の文法的特徴の描写にとどまっていることが多い。文法体系を明らかにするためには、問題の文法項目の機能が明確に現れているような文を収集することが必要である。その方法としては媒介言語を用いて当該の言語の文を引き出すことが考えられるが、その場合、媒介言語からの影響を常に考慮に入れておかなければならない。調査者が当該の言語に習熟すれば、その言語で調査をすることも可能になるかもしれないが、それでもその質問によって得られた文はあくまでも調査者主導で導き出された文である。はたして実際にそのような文が自然に用いられているのかわからないし、その文に現れる問題の文法形式の生産性や頻度もわからない。その点、話者自身の自発的な語りによればこのような問題は生じない。前後の文脈や文化的なコンテキストも明確になる。

できあがった文法の記述には、多かれ少なかれ記述した者の言語観や拠り所としている理論が背景にある。つまり文法記述はその調査者の視点という色眼鏡を通したものになってしまう。そのような時に、その文法記述を引き出した元のテキストが公開されていれば、後進の研究者は問題点を確認することができるわけである。

何百万、何千万の話者人口を有し、整った正書法を持ち、長年にわたる文書の蓄積があ

る言語ならば、無論こうしたテキストの収集は不要である。その言語で書かれた文学作品や新聞、雑誌など全ての刊行物がその言語のテキストコーパスとなりうる。ここで必要なのはもはやテキストの電子化（入力作業）だけである。しかし文字を持たない言語も多数存在し、消滅の危機に瀕している言語もたくさんある。その場合その言語の記録は性急な課題となる。先に述べたような通言語学な考察も、こうした多様な少数言語を広く見渡した上での結論こそが、真に説得力のあるものとなる。

そうした少数者の言語は何もアフリカやニューギニアの奥地のようなところにばかり話されているわけではない。そのことは日本語の諸方言が共通語の波に押され徐々に消えつつあることをみても明らかである。漢語は世界でも最大規模の話者人口を持つ大言語であるが、ここにも一般に言われる 60 弱の少数民族の言語とは別に、共通語となっている北京官話とは全く通じないほどに異なった漢語の諸方言が存在する。本書は期せずしてこのような二つの言語／方言（日本の福島方言、および中国の平江方言）の口語テキストを収録することができた。もう一つ、本書で扱われているハワイ日系人の日本語は、普通の日本国内の諸方言とはいくぶん性格を異にするユニークな存在であり、その記録は貴重である。ここには言語接触の問題が関わってくる。

以上の言語／方言の論文を執筆した幡早夏、酒井幸、張盛開、およびフィンランド語を扱った坂田晴奈の四名は筆者（風間）のゼミの院生である（執筆当時）。これに吉枝聡子助教授のゴジャール・ワヒー語の基礎語彙の研究が加わって、本書が成立した。筆者のゼミ生の研究成果がこのように一冊の本にまとまるのはうれしいが、筆者の指導が不十分なことから、その論文にも不十分な点が多々見受けられよう。読者の方の厳しい御叱正と御指摘を賜りたく思う。

末筆ながら、こうした分野の研究ならびに研究方法に理解を示してくださり、こうした発表の場を与えてくださった COE の中心となっている先生方、ならびに予算の管理や原稿の整理をはじめ多大な事務をこなされている事務局の方々に深くお礼申し述べたい。